

# 『善那余話』からみた 東京国立博物館ジェンナー像建立の経緯

深瀬 泰旦

順天堂大学医学部医史学研究室

受付：平成20年8月29日／受理：平成21年1月9日

**要旨：**わが国では3種・5体のジェンナー塑像が制作されたが、その1体である東京国立博物館の庭に立つジェンナー銅像について、『善那余話』にもとづいてその建設の経緯をのべた。それによると静岡在住の牛田友質と佐々木養は収集したジェンナーの肖像写真を、明治29年におこなわれたジェンナー種痘発明100年記念会に提供し、それを参考にして大日本私立衛生会がジェンナー銅像（米原雲海作）を建設して皇室博物館に設置した。これが今日東京国立博物館の前庭にたっているジェンナー銅像である。『善那余話』は、わが国の人々がいただいているジェンナーへの讃称の心をしめす貴重な文献というべきものである。

**キーワード：**エドワード・ジェンナー像、『善那余話』、米原雲海、牛田友質、佐々木養

## はじめに

上野公園の東京国立博物館の庭に立つエドワード・ジェンナー像の建立についてはいくつかのエピソードがのこっているが、その発端になったのは浜松に在住する2人の篤志家の情熱と行動によるところがおおきかった。『善那余話』と名付けられた小冊子からその経緯をさぐってみたい。

## ジェンナー種痘発明100年記念会

明治29年3月4日の第5回医家先哲追薦会の席上「ジェンナー氏種痘発明百年期記念会」が催された。主催団体である奨進医会の田口和美会頭が開会の辞においてこの会が開催されるにいたる経過をのべているが、そのなかでジェンナーの画像を蒐集することができたのは、浜松在住の牛田友質と佐々木養の厚意によるものであると明言している。それによればこの2人は浜松にジェンナー像を建立しようとして奔走するのだが、それに先だってジェンナー画像を入手しようと八方手をつくした甲斐あって6葉の写真を入手することに成

功した。そのようにして蒐集した資料を、この会のために提供してくれたことに心からの感謝の意を表したい、というのである<sup>1)</sup>。

田口会頭がこのように感謝の気持を表明しているところから、おおいに貢献をするところがあったと思われるのだが、この2人がどのような人物であり、この記念会とどのような関わりをもっていたかについては、この会頭挨拶からは知ることはできない。

それからおくれること約2ヶ月の5月14日に、大日本私立衛生会はじめ9医療団体の共催による「善那氏種痘発明百年期記念会」が上野公園博覧会跡地において華々しく開催された。この記念会においても、牛田、佐々木が収集した6葉のジェンナー像の写真が出品された<sup>2)</sup>。そこには在ロンドン日本総領事館に勤務する大越成徳領事によって、はるばる海をこえて郵送されてきた経緯が明らかにされている。

## 『善那余話』について

これだけ詳細に状況がのべられていながら、現

在までに2人の人物像を知る手がかりはまったくなかった。しかし今回この経緯を明らかにする資料としての『善那余話』を披見することができた<sup>3)</sup>。

本書は16.2 cm×23.5 cm、わずか28ページの穿孔版袋綴綴本である。題箋には「善那余話」とあり、口絵として「善那先生像」、「善那先生銅像」、「痘瘡の絵」がのっている。扉には「善那先生余話／浜松曳馬尋常小学校」とあり、扉の裏にはつぎのような凡例がみえる。

○尋常四年修身書中の発明(ジェンナー)に関する補充郷土教材の参考資料にもと本書を編纂したものである。

○本文記事は雑誌「土のいろ」の第九巻第四号及び第十三巻第三号に掲載してあったものを、同誌の許を受けてそのまま採録したものである。

○口絵三枚は新に撮影したもので、この撮影のために特別な便宜を与えられた浜松元城小学校長石原嘉太郎先生及び三輪桂作先生には深く御礼を申し上げます。

○近く県主催修身教育研究会が浜松市に開催されると聞き、謹んで本書を各校に呈して御利用をお願いする次第である。

これにつづいて「本書印刷百部 昭和十三年九月」とあることによって、奥付を欠く本書が昭和13年9月の発行であることは知ることができる。編者は扉の記載から浜松の「曳馬西尋常小学校」といえようか。

まず「善那先生像」「善那先生(銅立像)」「牧村牧童作昨絵巻 種痘の絵の一部」として口絵の目次があり、つづいて本文の目次として

善那祠堂建立の企 三輪桂作 補飯尾哲示  
再読後記 大野徳

絵巻「種痘の絵」につづいて 三輪桂作

とある。さらに目次裏にはつぎのような口絵の解説がくわえられている。

#### 一、善那先生像

英国駐割日本領事ヨリ浜松ノ牛田・佐々木両氏へ贈ラレシ写真ナリ。善那先生ノ郷里ノ村ニ立テル像ナリト云フ。

#### 二、善那先生像(銅立像)

浜松元城小学校所蔵品ニシテ、高一尺四寸、台座前面ノ文字ハ、「治痘救世善那神医」ト刻シアリ、全ジク後面ニ「日本米原雲海謹作」トアリ。

#### 三、種痘の絵

牧村牧童作絵巻ノ一部ナリ、絵ハ全部彩色画、絵巻ハ縦約六寸、横十七尺、全十七図ヨリ成ル。

さて本文が執筆されたのはいつのことであろうか。「善那祠堂建立の企」の「はしがき」において「今春(昭和七年)四月頃、浜松市に天然痘が発生し」たおりに、郷土雑誌『土のいろ』同人の座談会において「善那祠堂建立を企てた人々」があったことをはなしたところ、「時節柄珍しい話であるから『土のいろ』へ出しては」といわれたので執筆したという。筆者三輪桂作のいうところでは、話の大筋は72歳になる母からの聞書であるとのことである。後にのべるようにこの母は牛田友質の長女であり、これによって本書が執筆されたのは昭和7年(1932)であるといえよう。

「再読後記」の筆者大野徳は牛田友質(1834-1921)の次男であり、三輪桂作の叔父にあたる。「善那祠堂建立の企」をよんだ大野徳が、それに注釈などをくわえたのが「再読後記」で、末尾に「昭和十年六月廿六日千葉県松戸の茅舎に於て深更古き記憶を辿りつつ雫筆を噛みしめて覚東なくも誌し終る」とあることにより、昭和10年の執筆であることがわかる。

これらの原稿が『土のいろ』に発表されたのは、前者が第9巻第4号(昭和7年)、後者が第13巻第3号(昭和11年)で、その後それらをまとめて昭和13年にこの穿孔版が復刻されたといえよう。

つぎに筆者である三輪桂作と大野徳についてのべよう。牛田友質の長男は景次、次男は徳(いさお)であり、ほかに女子が1人あってこれが三輪氏に嫁ぎ、その男が三輪桂作である。

長男の景次についての個人的経歴はまったく不明である。

次男の徳は明治元年生まれで、岡山県茶屋町の

大野家に養子にはいった。大正の末期には横浜市生麦にすみ、神奈川県港務部に医師として勤務していた。昭和期には千葉県柏市で眼科医院を開業していたという。

『善那余話』はこのような関係にある子孫が、その父と祖父ののこした業績を顕彰するという、肉親愛にみちた善意溢れる編纂物といえることができる。

### ジェンナー祠堂の建設

牛田友質と佐々木養がジェンナー祠堂を建設しようとしたのは明治24年であるという。しかしその素志は10年ほどさかのぼる明治15年ごろに芽生えていた。当時この2人は静岡県浜松病院で会計係をつとめていた。あるとき院長福島豊策(1838-?)と副院長多々良梅庵(1848-1912)の衛生講話をきいて、種痘の発明者がイギリスのジェンナーであることをしった。おそらくジェンナーの牛痘法が、天然痘という疫病から人類を救済するうえにいかにか偉大な力を発揮したかという内容であったのであろう。ジェンナーのこの遺徳を永久にたたえたいという気持ちが凝縮して、ジェンナーの像をまつる祠堂を建立したいという気持ちかられたのである。

浜松病院は明治6年3月に浜松の紺屋町にもうけられた会社病院を引き継ぐ形で、明治7年1月に県立に移管された。太田用成(1844-1912)が初代院長職についた。太田用成が明治12年に辞任し、その後任として福島豊策が院長に、多々良梅庵が副院長に就任した<sup>4)</sup>。

牛田友質は天保5年(1834)に江戸に生まれた旧幕臣である。景一郎と称して元治・慶応のころに新御番から転勤して別手組出役頭取になった。別手組というのは文久3年に外国御用出役が改称された役職で、外国の公使などの出向にさいして護衛にあたるのを任務としていた。幕府瓦解とともに埼玉にうつり、1年後に浜松にうつって浜松病院に勤務するようになった。和歌をこのみ、篆刻にも趣味をもっていた風流人であった。大正10年(1921)12月に88歳で静岡において永眠した。

佐々木養(1826-1901)は浜松藩の剣術指南役

をつとめたことがある。明治34年(1901)に76歳で浜松で病没したというから、逆算すると文政9年(1826)生まれということになる。きわめて几帳面な性格で、道路をあるくのも真直ぐに、曲がった枝振りの植木は好まないという武士気質の旺盛な人物であった。

この2人はジェンナー像の建立を目論んだものの、ジェンナー Edward Jenner (1719-1823) がどのような風貌の持主であるか皆目わからないことが最大の難点であった。これを解決しなければジェンナー像を建立することはできない。そこでまずジェンナーの肖像画を蒐集することからはじめなければならなかった。とはいえ当時わが国にそのような肖像画なり、肖像写真が存在するのかどうか、2人はそれについての知識もまったくもたあわせていなかった。

牛田、佐々木の2人は医師ではないが大日本私立衛生会静岡県遠江支会の会員なので、その伝手を頼って、この企画をまず上部組織である東京の大日本私立衛生会で副会頭をつとめる長と専齋に相談をもちこんだ。長とはこれにたいして心からの賛意をあらわし、温かい心情のこもった書簡を浜松病院長であり、遠江支会の副会頭でもある福島豊策によせた。その一節を引用してみると

拝展(中略)陳者牛田佐々木ノ二翁「ゼンネル」氏牛痘発明ニ付記念碑建設之発起有之趣了承、実ニ二翁ノ厚志平素ノ徳行被思遺感服之至ニ御座候、牛痘発明ノ如キハ今日迄ハ勿論、今後幾百世ニ涉リ億兆之生ヲ保チ候議ニテ、其功德ノ廣大無窮ナル他ニ比スベキモノ無之候得共、世人ハ其恩沢ニ浴シナガラ不知不識ノ間ニ性命ヲ保チ、曾テ何人ノ発明ナルヤヲ問ハサルモノ不少、然ルニ数千里之外、百年之後ニ於テ二翁者其功德ヲ追想景慕シテ表彰ノ挙ヲ企テラレ候事、特リ医事衛生ニ従事スルモノノ名誉ナルノミナラズ、世界万国ニ対シ我日本之光輝ヲ宣揚致シ候事ト敬服仕候<sup>5)</sup>

とあって、二人の計画にたいして最大の賛辞を呈している様子が見える。

この書簡の宛名は福島豊策であり、その日付が明治24年1月22日となっているが、これは兩人の計画について福島から長与に賛否を問うた書簡にたいする返信であり、のちにのべるように牛田、佐々木の2人が、ロンドンの大越領事に依頼するのが明治24年12月のことなので、これは明治25年が正しいものと思われる。それはともかく長与はこの計画にいたく感銘をうけ、これがのちのジェンナー顕彰事業の引き金になったことは充分考えられる。

### ジェンナー肖像画の収集

牛田、佐々木がジェンナーについての情報を求めたのはかれの祖国イギリスであった。ロンドン総領事館にたいして単刀直入に接触をはかった。牛田友質が旧幕時代に別手組として異国人に接していたことが、外国人にたいするアレルギーを緩和させ、このような直情な行動をとらせたのかも知れない。

在ロンドン総領事館勤務の大越成徳領事<sup>6)</sup>に依頼の書簡を発送したのが、さきにものべたように明治24年12月のことである。この依頼に答えて大越領事は精力的に奔走して、まず明治25年3月19日に「或古書店ニ於テ同氏ノ写真見当候間之ヲ買入」れた肖像写真の1葉を、その後5月28日には「石版肖像四枚及倫敦ケンシングトン公園内ニ建立シアル偶像写真一葉」を郵送してくれた。この石版刷の肖像画は「英国医術雑誌ノ編集長ドクトル、アーネスト、ハート氏」の斡旋によるとしているが、この雑誌とは *British Medical Journal* であろう。大越領事の返信には、今回にかぎってこれに要する費用は特別扱いとする旨の厚意ある計らいが記されていた。イギリス人であるジェンナーの偉業を顕彰しようという奇妙な計画に感銘をうけたからにちがいない。

ジェンナーにはおおくの肖像画がのこっているが、おくられてきた写真がだれの筆になる肖像画を撮影したものか、これだけの記述からは特定することは困難であるが、6葉の写真のうち、1枚は『善那余話』の口絵にのる図からグロスター教会にある立像を撮影した写真であり、他の1枚は

書簡の記述からケンジントン公園にある有名なジェンナー像の写真であることがわかる。そして他の1枚は善那氏種痘発明百年記念会の出品解説カードから、ノースコート James Northcote (1764-1831) が描いた肖像画の写真であることは明らかである。結局6枚のうち、その内容がつかめるのは3枚にすぎないが、のちにのべるようにノースコートの肖像画は2種類あるので、そのいずれかを特定するにたる資料はない。しかしこれは「一八〇四年刊行の『欧州雑誌』に載せられたる原本」にもとづいてかかれたとの解説カードの記述から、あるいはその前年の1803年に完成した第2の肖像画であるといえようか。

### 祠堂の建設運動

大越領事の好意によって6葉のジェンナー像を入手した牛田、佐々木の2人は、おおくの同志を糾合すべく「種痘発明人エドワードジェンネル氏祠堂建設主意書」を各方面に発送した。この趣意書は、ジェンナーの発明した種痘が疫病の惨禍からいかに人類を救済したかを格調高い内容でうたいあげている。しかしその1節に

種痘法普及ノ今日ヨリ数年ヲ経過セバ如此ハ既ニ前代ノ一話柄トナリ可畏厭悪症ノ惨況ヲ知ル者ナキニ至ラン明治年代ノ少年如此多事ナルハ抑是誰ノ庇蔭ゾ畏クモ兩陛下人民愛撫ノ御聖恩ト彼ノジェンネル氏牛痘接種法発明ノ功德ト相待テ茲ニ至リシモノト云フノ外ナシ<sup>7)</sup>

とあって、ジェンナーの業績を顕彰しながらも、同時に天皇・皇后の仁徳にふれているのは、やはり当時の時勢のしからしむるところというべきであろうか。

募金の目標額は3,000円で、募集期限は明治26年9月30日としている。祠堂の建設場所は浜松町五社神社の境内として、落成後の明治28年5月14日に100年祭を挙行したいという意気込であった。

これに賛同するものは伊藤泰教、岡部讓、太田用成、内藤武雄、中島熙、内田正、福島豊策の7

名の評議員であり、浜松をはじめ県下一円の274名の医師たちが発起賛成者に名をつらねている。この趣意書を『大日本私立衛生会雑誌』にも掲載して、全国的に寄付金を募集したというが、いまだそれを寓目する機会をえていない。

この年、牛田友質は60歳、佐々木養は68歳と、当時としてはけっして若い年齢でなかったので、趣意書のなかでも自らを「老人」とよんで、本来ならこの企てを全国の人びとにうたえて賛同をえたいところだが、「斯克テハ夥數年月ヲ費シ候事ニテ到底余年無之老人共ノナシ得ヘキ所ニ御座ナク」とのべて、あまり広範囲の募金はおこなわなかったようである。

しかも時勢はかれらに味方しなかった。運動半ばにして日清戦争が勃発して事業の進捗は思うにまかせず、ついに断念せざるをえない状況に追いこまれてしまった。

### 100年記念祭の開催

そうこうするうちにジェンナー種痘発明から100年という節目の年を目前にして、かれの偉業を顕彰しようとの気運がうまれた。その動きは100年記念の年の前年明治28年からみられる。この年の4月に東京顕微鏡院において開催されたマルピギーの200年祭の席上、この話がもちあがったという<sup>8)</sup>。

100年記念会を立案、計画したのは1は奨進医会であり、他は大日本私立衛生会を中心とした医療9団体であった。明治29年をむかえた1月中旬から両記念会の準備は平行して開始された。両記念会ともその趣旨にはおおきな隔たりはないが、主催団体の性格の相違から理解できるように、奨進医会の記念会はジェンナー種痘法の発明に祝賀の意を表するにとどまらず、科学的思考に裏付けされた牛痘接種法の意義を明らかにするとともに、人類の福祉への偉大な貢献にたいする顕彰の実をしめそうとする姿勢がみられる。これにたいして後者ではジェンナーの偉業を讃仰しようとの熱意はもちろん旺盛だが、それよりも一般世人への牛痘接種法にたいする啓蒙的色彩を前面に押しだした会合であった。

大日本私立衛生会といえばその副会頭である長与専斎(1838-1902)の名がうかぶ。かねてから牛痘法の予防医学における意義に着目していた長与は、この年をさかのぼること数年前に浜松地方の医師たちから相談をうけていたジェンナー顕彰運動がおおきなヒントになったことは疑いのないところである。ジェンナーの碑を建立し、100年記念会を華々しく催そうとの気運が芽生えたのは当然のことである。

中央でのこの計画を耳にした牛田友質と佐々木養は、浜松における建設計画を途中で断念し、その全部をあげて中央の事業に参加しようと決心して、遠江支会会頭太田用成をとおしてそれまでに大越領事から送付されてきた肖像写真と、賛同者からの寄付金を提供することを申しでたのである。

その申出にたいして会頭土方久元からは公文書で丁重な挨拶状<sup>9)</sup>がおくられてきたが、それと平行して副会頭の長与専斎からも私信として2人にたいして感謝の意をつくした礼状が到達している。その1部を引用すると

年来之御宿志相達候時節到来御満足之程想察仕候、於老拙ノ当初ヨリ御相談ニ預リ居今日之結局ニ及候段安心此事ニ御座候<sup>10)</sup>

とあってジェンナー像を建立しようとのかねてからの念願が、これによって達成されることにたいしての祝意を表明しているが、浜松の兩人にとって、はたして手放しで喜べるような割切れた気持ちであったろうか。

3月4日におこなわれた奨進医会主催の記念会に展示された肖像は、牛田友質と佐々木養が所蔵するジェンナー像写真6葉と、富士川游所蔵の「ジェンナー家族ノ像」1葉、藤田文蔵制作のジェンナー塑像などである<sup>11)</sup>。

一方5月14日の記念会当日に会場に展示された6枚のジェンナー肖像写真も、『報告書』によれば「浜松 牛田友質君 佐々木養君 出品」とのことなので、三月記念会と同じ品が展示されたと思われる。これらの由来についてはさきにのべたところである。ここには、このほかにジェン

ナーがはじめて牛痘を人体に接種している図や、ジェンナー一族の像があったという<sup>12)</sup>。

### 3種のジェンナー像

現在までにわが国には3種・5体のジェンナー像が存在した。

1) は本論のテーマである、現在東京・上野公園にある国立博物館前庭にたつ青銅像(図1)である。明治37年6月に大日本私立衛生会によって建立された、左手にもった書物を食入のようにのぞきこんでいる像である。銅造高は178.8cm, 銅盤高は9.4cm, 鉄台座高は151.5cmで、全高は339.7cmになる<sup>13)</sup>。

この像の製作経緯については、東京芸大芸術資料館泉宏尚によると、

この像が制作された動機は明治二九年五月、土方久元らが主唱して種痘発明百年記念会というのが設立され、この会がジェンナーの銅像を建立することを計画したのにはじまり<sup>14)</sup>

とあるが、建設計画を推進していたのは百年記念会ではなく、実は主催団体の1である大日本私立衛生会である。

明治29年にジェンナー種痘発明を記念して、衛生関連9団体を糾合して組織した善那氏種痘発明百年記念会が5月14日に上野公園において華々しく開催された<sup>15)</sup>。このときの予算規模は321万8千余円という膨大なものがあった。諸行事終了後にその余剰金が大日本私立衛生会に寄附されて、これが資金となってジェンナー像が建設されたのである。決算表の支出項目に「銅像鑄造寄附金」として20万円があげられており、備考欄に「余剰金ハ総テ銅像鑄造費トシテ大日本私立衛生会ニ寄附シタリ」とあることによってこれが裏付けられる。しかしその銅像建設費の総額は1,379円6銭であったという<sup>16)</sup>。

大日本私立衛生会の後藤新平(1857-1929)が東京美術学校(現在の東京芸術大学美術学部)に制作を依頼し、同校では木彫科の高村光雲を制作主任として、実際の制作には助手の米原雲海が従



図1 ジェンナー銅像

米原雲海作 国立博物館蔵。『歴史読本』34巻8号所収 深瀬泰旦「牛痘接種法をひろめた人類の恩人ジェンナー」より引用。

事した。明治30年3月ごろには着手されたようで、同年11月には木彫の原型が完成した。これがつぎののべる2)である<sup>14)</sup>。

米原雲海(1869-1925)は明治2年(1869)8月22日に出雲国安来(現在の島根県安来市)に生まれ、旧姓は木山、本名は幸太郎という。16歳で米原家の養子にはいった。はじめ塔大工などに建築彫刻をまなんで大工をめざしたが、のち京都や奈良の古い仏像に感銘をうけて彫刻家になることを志して、明治23年に上京して高村光雲の弟子になった。師の光雲さへもかれの腕の冴えには一目をおいており、弟弟子の平櫛田中も舌を巻いてその技量を賞賛するほどの腕前であったという<sup>17)</sup>。

そればかりではない。このジェンナー像は日本近代彫刻史上でも重要な意義をもつ作品である。それまでの制作方法とは異なって、はじめに60cmほどの木彫の原型をつくり、それからコンパスをつかっておおきく引きのぼすという手法を

とった<sup>14)</sup>。

米原雲海は明治40年には山崎朝雲らと日本彫刻会を結成して、日本の伝統的な木彫美を追求した。文展や帝展の審査員をつとめた木彫界の重鎮である。大正14年(1925)3月25日に心臓病で病歿した<sup>18)</sup>。

このジェンナー像はなにを参考にして制作したのであろうか。泉宏尚はこの点について

ところでこの像を見ると、腰をひねったポーズや、手先の動き、洋服の着こなし、服装の細部にいたるまでの的確な描写など、ピタリときまって寸分のすきもない。作者雲海の腕の冴えも称賛にあたいするが、もしや彼地からもたらされた画像か、彫像かよりどころとなるものがあったのではなからうか。専門家の調査でも今のところそのようなものは見当たらないそうであるが<sup>14)</sup>

とのべているにとどまり、明確にすることができなかったようである。そのころのわが国において参考になる資料といえば、牛田友質と佐々木養がイギリスから送付してもらった6葉の写真か、あるいは『東京医事新誌』にのる画像<sup>19)</sup>であるが、果たしてそのいずれを参考にしたものか、確定することはなかなか困難である。それにこの像はいかにも少年をおもわせる顔立ちなので、まったく別の資料に拠ったのかもしれない。大滝紀雄は「雲海のジェンナー像の基本となった原図か原像が何であったか、今回入手した資料によってほぼ理解できる」としながらも、確たる意見をのべていない。これにつづく文では、「雲海は少なくとも前掲六枚の写真を参考にして、ジェンナーの像の作製に当たったと考えるのが妥当である」とだけしかのべていないので、これによると特定のジェンナーの写真に準拠したのではなく、それぞれの写真から特徴を抽出して原図を決定したということになるであろうか。大滝紀雄はこのジェンナー像を読書型とよび、のちにのべる像を瞑想型とよんで区別している<sup>20)</sup>。

ジェンナー像建設の経緯については緒方富雄の

論文にくわしい<sup>21)</sup>。青銅像が完成した時期は明かではないが、台座の銘板によると明治37年6月に帝室博物館(現在の国立博物館)の傍らに建てたという<sup>22)</sup>。その場所について博物館には記録はないが、「きいているところでは、正門の正面にある本館に向かって右側にあったという」と緒方はいふ。その後この本館は昭和6年に改築がはじまり、工事の都合で表慶館の後の広場にうつされた。さらに表慶館とこの像との間の空地に法隆寺宝物館が建設されて、ますます鑑賞するには相応しくない環境になってしまった。昭和54年にいって、日本医史学会と蘭学資料研究会の共同事業として移築が決定し、この年の12月24日に正門をはいってすぐ右手にあるイギリスの大木の下に移築が完了した。

帝室博物館にジェンナー像が建立されながら、その像の建設にあたって写真の入手に一方ならぬ尽力した牛田友質にたいして、博物館側はその事実をまったく通報しなかった。そこで二男にあたる大野徳は大正9年にいって、当時の館長森林太郎にたいしてジェンナー像の写真の送付方を申し入れた。父牛田友質がこの挙にさいしていかにも努力、苦心を重ねたかを縷々説明して、

若夫幸ニ御館構内ニ据附ケラレタル該銅像ノ写真等有之候得者複写一葉御分譲相願度代償ハ自分ヨリ相弁シ可申候<sup>23)</sup>

とまことに低姿勢な態度で依頼している。いかにも時代を反映した官僚全盛の様子がうかがえる書簡であり、エピソードであるといえよう。

2)はこの読書型ジェンナー像と同一意匠で、青銅像の原型となった木彫像(図2)である。ほぼ等身大で全身に漆がぬられ、銅像のような感じを呈している。現在、東京芸術大学大学美術館に収蔵されているが、この木像では左手の書物はみられない<sup>24)</sup>。加藤四郎によるとこの木像は「少年像でも青年像でもなく、明らかにジェンナー壮年の像と見えた」<sup>13)</sup>という。さらに

色調といい彫りのまるやかさといい、銅像を



図2 ジェンナー木像

米原雲海作 東京芸術大学大学美術館蔵。同美術館の許可をえて引用。

そのまま移したかと思われるほどであり、木彫という言葉からうける印象とほど遠いものであった。

とのべている<sup>13)</sup>。この木像を原型にして青銅像が鑄造されたので、その容貌はやはり青銅像と同じである。またはじめに2尺ほどの木像をつくり、それをコンパスで6尺ほどに拡大して完成した。そこで加藤は、この2尺の木像はどこに存在するのか、と追求しているが、その像の行方はわからないという。

3)は右手を肩にあて、左手に書物を鷲掴みにして物思いにふけているが如き像(図3)である。さきの像といい、この像といい、二つながらその顔は少年を思わせるようなあどけない風貌であり、これも制作者は米原雲海である。

瞑想型のジェンナー像についてもその制作意図と制作過程が明らかにされている。大正11年(1922)はジェンナー没後100年にあたるので、牛田友質の次男の大野徳は、これを機にジェンナー小伝と小像を頒布する計画をたてた。桂六十郎とともに善那先生遺徳顕彰会を組織し、その腹



図3 ジェンナー銅像

米原雲海作 川田忠良蔵。加藤四郎文献(24)より引用。

案を東京顕微鏡院の遠山椿吉にしめして賛同をえて、米原雲海に制作を依頼した。

ジェンナー鑄像1体と小伝1部を大正天皇に献上し、全国の医師をはじめ諸官庁や一般の銀行、会社にも頒布しようと計画したが、85円という高価のためか予想したような申込みはなかった。結局5体が世に出たにすぎないという記録がのこっている<sup>25)</sup>。

4)は島根県浜田市の万灯山公園にあるジェンナー像である。明治33年(1900)8月にジェンナーの種痘発明百年を記念して浜田市鏡山に善那先生頌徳碑が建設された。この頌徳碑の建立100年を記念して制作されたのがこの銅像である。原型となったのはさきののべた米原雲海の制作になる読書型ジェンナー銅像であり、2000年4月16日に除幕式がおこなわれた<sup>26)</sup>。

5)は藤田文蔵(1861-1934)の制作になるジェンナー像で、明治29年5月14日の記念会当日に中央演壇の左側に安置されていたものである。作者自身の言葉によれば<sup>27)</sup>この像はジェンナー氏種痘発明百年記念会の委嘱により制作された作品だという。制作にあたっていくつかのジェンナー



の肖像画があって、どれに準拠したらいいのかおおいに悩んだが、結局、ノースコートの描いた肖像画を参考にして制作した。制作にあたっての基本的態度としては、ただだんに容貌を写すだけでなく、内にひめられた精神の迸りを表現することが肝要であると自らに言い聞かせて、そのために世の中につたえられているジェンナーの性行をさぐり、ジェンナーの

敬慕に堪えざる美はしき行為香はしき精神に  
 充ち居られしもの、如し、要するに氏は熱心  
 なる宗教家にして長閑けき春の大空の如き温  
 和なる性情に富まれしもの而も一事の衝に当り  
 てや、天に漲ぎる怒濤の裡に毅然たる巨巖の  
 如く万難不撓之を遂げずんば已まず<sup>27)</sup>、

との精神性を看破して、これを表現すべく努力をかさねた。しかしはたしてその意図するところを十分に表現することが出来たか否か、いささか自信はないと謙虚な言葉をのこしている。

『報告書』にはさきのように記載されているが、一方『医談』によると「此ハ塑像ノ名家藤田文蔵ガ本会ノコノ挙アルヲ聞キ自カラ作リテ之ヲ本書ニ寄贈セシモノ」<sup>11)</sup> だという。このどちらが正しいか、いまのところ決め手となる史料を寓目する機会がない。作者の制作態度はこのようなものであったが、はたしてどのような意匠の像であったか、現在その像自体も、写真ものこっていないので明らかにすることができないのは残念である。ストーリー H. R. Storer は Bust (胸像) であるとしているのが、これがこの像の形状についてふれている唯一の文献である<sup>28)</sup>。

藤田文蔵は文久元年(1861)8月6日因幡国法美郡湯所(現在の鳥取県岩美郡)の生まれで、田中家から藤田家に養子にはいった。明治9年に洋画家を志して上京し、国沢新九郎の洋画塾彰技堂にまなんだ。同年の工部美術学校開校とともに彫刻科に入学して、ラグーザ Vincenzo Ragusa (1841-1927) に師事して彫刻を学んだ。明治15年同校を卒業し、明治17年に彫刻専門学校を設立しようとしたが失敗におわった<sup>29)</sup>。この年有栖川宮親

王、小松宮親王の彫像を制作し、明治19年文部省の図画取調掛雇となり、明治24年東京美術学校の彫刻授業を囑託される。この間、明治19年にニューオーリンズ万国工業博覧会に出品して巧賞をうけた。

明治23年から東京美術学校雇、同34年東京美術学校教授に就任し、同38年まで同校の教授をつとめた。一方、同34年には東京女子美術学校(現在の女子美術大学)の設立発起人の1人となり校長となった<sup>29)</sup>。明治10年に洗礼を受けた熱心なクリスチャンで、大正8年には四谷キリスト教会の牧師になった。銅像製作を得意とし、代表作に「陸奥宗光像」(明治40年)、「井伊掃部守像」(明治42年)<sup>30)</sup>、「榎本武揚像」(大正2年)<sup>31)</sup> などがある。わが国における洋風彫刻の先駆者の一人である。昭和9年(1934)3月9日に病歿した<sup>32)</sup>。

これを要するにわが国は3種・5体のジェンナー像が存在するが、1体については現在のところ所在不明である。

## おわりに

わが国には3種・5体のジェンナー塑像があるが、その1つである東京国立博物館の庭に立つジェンナー像について、『善那余話』にもとづいてその建設の経緯をのべた。この『善那余話』は、わが国の人々がいただいているジェンナーへの讃称の心をしめす貴重な文献というべきものである。

本稿の要旨は第106回日本医史学会総会(2005年)において発表した。

『善那余話』は静岡県立大学名誉教授岩崎鐵志先生より恵与をうけた。そのご好意に心からの感謝の意をささげる。またジェンナー像の種々相については大阪大学名誉教授加藤四郎先生よりご懇篤なご指導をいただいた。心からの謝意を表する。

## 注と引用文献

- 1) 「第五回医家先哲追薦会 式典」『医談』32号 1-4ページ 明治29年
- 2) 佐藤保編『善那氏種痘発明百年記念会報告書』明治30年 136ページ

- 3) 浜松曳馬西尋常小学校編『善那余話』昭和13年
- 4) これについては土屋重朗『静岡県の医史と医家伝』戸田書店 昭和48年 374-383ページにくわしい記述がある。太田用成は弘化元年(1844)に信濃国飯田藩土館野四郎左衛門の三男として生まれ、のち飯田藩医太田玄中の養子になった。院長在任中に有名な「七科約説」を翻訳している。なお福島豊策については同書487-488ページに、多々良梅庵については同書492-496ページにくわしい。
- 5) 『善那余話』4-5ページ
- 6) 『善那余話』には「英京ロンドンの日本公使・領事あて」とあるが、「在ロンドン日本総領事館の大越領事」が正しい。
- 7) 趣意書の全文は『善那余話』7-9ページに収録されている。
- 8) 『善那氏種痘発明百年記念会報告書』明治30年 1ページ
- 9) 『善那余話』11-12ページ 大日本私立衛生会会頭伯爵土方久元より遠江支会会頭太田用成あて書簡(明治29年6月5日付)
- 10) 『善那余話』12ページ 長与専斎より牛田・佐々木あて書簡(明治29年7月5日付)
- 11) 「第五回医家先哲追薦会 陳列」『医談』32号 10ページ 明治29年
- 12) 『善那氏種痘発明百年記念会報告書』136-141ページ
- 13) 加藤四郎「エドワード・ジェンナーの五つの彫像を訪ねて」『適塾』12号 73-81ページ 昭和54年より引用した。
- 14) 泉宏尚「ジェンナー像 米原雲海作」『医学撰粹』23号 3-4ページ 昭和55年
- 15) ジェンナー種痘発明記念行事については深瀬泰旦「お玉ヶ池種痘所—その設立抛金者八二名誤謬説の起源をさぐる」『日本医史学雑誌』50巻 3号 405-427ページ 平成16年 において詳細に報告した。
- 16) この決算報告は『大日本私立衛生会雑誌』第257号(明治37年10月25日)にある。
- 17) 『朝日歴史人物事典』朝日新聞社 1994年 1795ページ
- 18) 稲村徹元ほか編『大正過去帳 物故人名辞典』東京美術 昭和48年 317ページ には3月26日とあり、またその姓の読みは「まいばら」となっている。
- 19) 『東京医事新誌』771号 附録 明治26年
- 20) 大滝紀雄「米原雲海作もう一つのジェンナー像」『科学医学資料研究』102号 1-6ページ 昭和57年
- 21) 緒方富雄「日本のジェンナー記念像をめぐる」『科学医学資料研究』72/73合併号 10-11ページ 昭和55年
- 22) 銘板には「六月」として日付の記載はないが、『大日本私立衛生会雑誌』第253号(明治37年6月25日発行 477ページ)には「本月一日を以て之を上野公園帝室博物館構内に建設するの認可を得たるに依り」とあり、また第257号(明治37年10月25日発行)には、「今や全く其工を竣へ」とあって据付けが完了したことを物語っている。
- 23) 『善那余話』14-16ページ
- 24) 加藤四郎『ジェンナーの贈り物 天然痘から人類を守った人』菜根出版 1997年 112ページ 本書は子ども(小学校高学年から中学生)向けのジェンナーの伝記である。著者の専攻である病原微生物学を根拠にして免疫学や予防医学を解説しながらジェンナーの不滅の業績を詳しくのべている。その1部としてかねてから念願であった世界中のジェンナー像を探索した旅についてのべた1章「ジェンナー像をめぐる旅」があり、ここに7種のジェンナー像についての解説がある。
- 25) 「善那先生銅像頒布のこと」『善那余話』16-18ページにはその頒布先として、大坂結核療養所長有馬頼吉、東京桂六十郎、小笠原平田村平川川田寿格、浜松元城小学校、京都某中学校同窓会の名がしるされている。このうちの1体、川田寿格所有の塑像は、その後孫にあたる川田忠良(横浜市中区開業医)にひきつがれていることを大滝紀雄が「米原雲海作もう一つのジェンナー像」『科学医学資料研究』102号 1-6ページ 昭和57年 において報告している。
- 26) 浜田市ジェンナー顕彰会『人類の恩人ジェンナーと浜田の頌徳碑』2000年
- 27) 『善那氏種痘発明百年記念会報告書』139-140ページ
- 28) Storer, H. R.: The Memorials of Edward Jenner. *Journal of American Medical Association*. 26: 312-317, 1896
- 29) 日蘭学会編『洋学史事典』雄松堂出版 昭和59年 618ページ には明治16年に東京市牛込区二十騎町に彫刻専門美術学校を設立とあって、さきの記述とは異なる。女子美術学校の創立については青木純子『美の原点 女子美術学校創立・再建の謎』(平成11年)による。
- 30) 佃実夫『横浜歴史散歩』創元社 昭和50年 184-188ページ 横浜市西区掃部山公園に建設されたこの銅像は、昭和18年、第二次世界大戦中の金属回収により撤去されたが、昭和29年に開港100年を記念して再建された。再鋳された銅像は、東京都世田谷区の豪徳寺所蔵の模型井伊大老像(約1メートル)を初鋳の藤田文蔵の原寸大(約4メートル)に拡大したものである。
- 31) 一坂太郎『幕末歴史散歩 東京篇』中央公論新社 2004年 193-195ページ 旧幕臣江原素六らによって、東京都墨田区旧木母寺境内の梅若公園に建設された。第二次世界大戦後の昭和22年に、他の軍人銅像や忠魂碑とともに撤去される対象にあげられながら、それをのがれてこの場所に現存している。
- 32) この項は『朝日歴史人物事典』朝日新聞社 1994年 1414ページ、日蘭学会編『洋学史事典』雄松堂出版 昭和59年 618ページ、『新潮日本人名辞典』新潮社 1991年 1474ページ による。

# Details of Construction of Edward Jenner's Statue, Based on “Zenna-Yowa” (The Tale of Edward Jenner)

Yasuaki FUKASE

Department of Medical History, Juntendo University School of Medicine

There are five statues of Edward Jenner which were constructed in Japan in the Meiji Era. One of them is standing in the garden of the National Museum of Tokyo. This paper describes the details of the construction based on “Zenna-Yowa” 『善那余話』 (The Tale of Edward Jenner) edited by the Hikiuma-nishi Primary School in Hamamatsu, Shizuoka. Jenner's portraits collected by Tomokata Ushida and Yo Sasaki were presented to the Jenner Centennial 1896, for which the statue was designed and engraved. “Zenna-Yowa” is a valuable document which expresses our respect for Jenner.

**Key words:** Edward Jenner's statue, The Tale of Edward Jenner, Unkai Yonehara, Tomokata Ushida, Yo Sasaki